2018年夏東京ストリートカウント報告書
2018年11月30日作成

＜制　作＞　ARCH(Advocacy and Research Centre for Homelessness)
協力：東京工業大学　環境・社会理工学院　土肥研究室
Special thanks to : Tomohisa Masuda

＜連絡先＞　arch.cd.office@gmail.com
東京都目黒区大岡山2-12-1 東京工業大学 W8-85

＜ リンク ＞　ARCHウェブサイト：http://archcd.wixsite.com/arch
土肥研究室ウェブサイト：http://www.dohi-lab.arch.titech.ac.jp/

2018 年夏東京ストリートカウント報告書

ARCH
through Community Design

2020年、56年ぶりに東京にオリパラがやってきます。世界中から人々が集まる大規模イベントであるオリンピック・パラリンピック。過去のいくつかの開催都市では、賃料上昇によって住宅を退去せざるを得ない世帯が増加したり、再開発のために貧困地区が一掃されたり、都市の表面的な見栄えのために野宿状態の人々が都市の外に移動させられたりと、華やかな大会の影で、社会的・経済的に弱い立場にある人々がさらに周縁に追いやられる事態が起きたという報告がされています。

しかし一方で、いくつかの都市は**オリパラを好機に**、自分たちの都市の**ホームレス問題に本気で取り組む**ことを決意し、アクションを起こしました。連携会議体を組織して次々と新たな政策を立案・実施したり、ホームレスの人々が公共空間にいる権利を行政機関が確認し合い、彼／彼女らを排除せずに包摂するという都市の態度を示すプロトコル（議定書）を結んだり、あるいはホームレスの人々によるオペラのパフォーマンスをオリパラの文化イベントに組み込んだりという力強いアクションがこれまでなされてきました。私たちの都市・東京は、そのどちらになるのか。世界都市としての東京の姿勢が、いま問われています。

ARCHでは2016年1月より、これまで6期にわたって市民参加型の深夜ホームレス人口調査**「東京ストリートカウント」**を実施してきました。これは市民一人一人がホームレス問題を考え行動を起こす機会を創るためのものであると同時に、ホームレス人口調査を昼間に実施し、本気で問題解決に取り組もうとしてこなかった東京都に対する、私たち市民セクターからのレスポンスです。2018夏のカウントでは、**都内15区7市**で**1,391名**の人々が**一晩に野宿状態**にあることを確認しました。これは、**東京都の昼間調査**の値**526名**の**約2.6倍**にあたります。少なくとも865名の人々が行政調査では見過ごされており、それ自体とても大きな問題です。また、ストリートカウントの結果に基づくと、**都内全域の推計**は**一晩に約2,300名**、**年間約2.5万名**の人が野宿状態を経験していると考えられます。

これらをふまえると、私たちの都市の行政体は実態をまったく反映していない数値をもとに政策を立てて事業を実施していることになります。倫理的な問題だけでなく、正確なデータに基づき効果的な政策を実施することは公的資金を財源とする行政体の果たすべき責務です。ARCHは、東京都が市民セクターからのイニシアティブに応じ、協働を通じて可能な限り正確な実態把握と効果的な政策立案を模索し、本気で問題解決に取り組むことを強く求めます。

「路上の風景は、あなたの**都市のシビックプライド**（市民の誇り）が何であるかを反映する」—こう語った、ある海外都市の都市マネジメント企業の方がいました。路上にホームレスの人がいることは、自分たちの都市がその都市の最も弱い立場にある人々を見守り世話をすることができていないということを市民につきつける。その海外都市では市民は自分たちの都市をとても誇りに思っているから、自ら路上にいる人たちを助けようと行動を起こすのだと教えてくれました。

東京に暮らす私たちは、私たちの都市を誇らしく思っているだろうか？2020年世界中から人々が集まり、**世界が東京を見ている**ときに、もし都市の表面を美化し華やかに飾るだけで、ホームレスの人々を周縁に追いやってしまったら、それは東京に暮らす私たちが誇らしく思える都市にはなりません。だから、誰しもがそれぞれの立場でホームレス問題のことを考え、小さくても行動を起こすことが、私たちの都市を誇らしく強いものにすると考え、ARCHはストリートカウントの活動を行っています。

東京ストリートカウントは、**市民参加**で行う深夜のホームレス人口調査です。2018年夏のカウントは、416名（のべ506名）の市民ボランティアの方々の協力を得て実施されました。また、2016年冬の初回からこれまで6期にわたり、合計**812名**（のべ1,419名）の市民がストリートカウントに参加し、深夜の東京を歩き、自分たちのまちに存在しているホームレス状態のことを知り、考え始めています。参加した市民は、年齢は10代から60代の方まで、所属も学生や会社員、議員、行政職員、非営利団体ワーカー、研究者など様々で、**6割以上が普段はホームレス問題に関わる活動をしていない人たち**です。

さらに今回の東京ストリートカウントでは、参加した方々にホームレスの人たちや世界中の人たち、都知事、同じ東京の市民などへ向けたメッセージを書いてもらい、この市民発の活動を社会に向けて一緒に発信してもらいました。例えばホームレスの人たちに向けては「暑いから無理しないでね」と心配する声や「今、何に困ってますか」「一度ゆっくりお話を伺いたいです」と、耳を傾けたい・感じていることを教えてほしいという声が聞かれました。また同じ東京の市民に向けて、「共にやさしく生きることを考えてほしい」「ホームレスの方も東京で暮らす同じ市民であることを感じてほしい」など、市民同士が理解し合っていきたいという想いや、東京を多様性を受け入れる都市に共にしていこうという声が発されました。

ARCHではこの声を第一歩に、これから市民、行政、支援団体、研究機関、企業、ホームレス経験者など、あらゆる人たちと話をし、声を集め、東京の都市全体でホームレス問題の解決に共に取り組むための**ホームレス憲章を2020年までに創りたい**と考えています。それは都市を自ら手入れし、多様性を受け入れ、訪れる人を歓迎し、自分たちの都市を誇って次世代へ受け継ぐ、そんな柔軟で強く**やさしい都市に東京がなるためのレガシー**を創ることに他なりません。共に歩んでいただけたら幸いです。

2018 夏東京ストリートカウントの概要

ストリートカウントとは

東京ストリートカウントは、2016年1月にARCHが東京で初めて実施した市民参加型の路上ホームレス人口調査です。これまで市民ボランティア812名にご参加いただき、計15夜6期に渡って都内16区7市を調査しました。

6期の結果から、東京都の昼間調査の約2.3~2.6倍の人が野宿状態にあるという実態が明らかになりました。こうした一連の結果は既存の政策の根本を問い直すものであり、行政や議会への政策提言・メディアでの報道につながっています。

ARCH とは

ARCH(Advocacy and Research Centre for Homelessness)は東京オリンピック・パラリンピックに向け、2015年10月に設立した市民団体です。ホームレス問題についてのアドボカシー(政策提言)と研究を行うチームで、研究者や学生、支援団体の現場ワーカー、法律家などのプロボノワーカーがメンバーとなっています。
今、世界の都市でホームレス問題への市民参加が広がっています。見えにくい問題であるからこそ、多くの市民が問題だと知り、取り組みに参加する必要があるからです。

人が人を大切にし、支え合う営みが、人と場所を結びつけ、柔軟な強さを地域に与える、そんな地域がたくさんある柔軟で強く優しい都市を目指しています。そして2020年のオリンピック・パラリンピック開催を控える東京が見た目だけ美しくなるのではなく、社会的・経済的に弱い立場にある人々を包摂し、多様な人々が共に暮らし支え合う営みをレガシーとして後の社会に遺せるよう、働きかけていきます。

2018 年夏東京ストリートカウント調査概要

日時	8月3日(金)24:30~28:30 （8月4日(土) 0:30~4:30）	8月4日(土)24:30~28:30 （8月5日(日) 0:30~4:30）
対象地	大田区／江戸川区／中野区／杉並区／世田谷区／三鷹市／調布市／府中市／国立市／立川市／武蔵野市／八王子市	渋谷区／新宿区／豊島区／文京区／千代田区／中央区／台東区／墨田区／港区／目黒区
	上記自治体のうち、駅の周辺や公園、公共施設、河川敷など事前調査や情報を元に選定した108のエリアを対象とした。自治体によってはごく一部の調査にとどまった場合もある。	
天候	晴れ	晴れ
気温	28℃	27℃
参加者	ウェブ等での公募による学生・社会人などによるボランティア	
参加者数	157名	232名
調査手法	目視による確認調査	
記録方法	地図への記入及び記録シートに下記項目を記入	
記録対象	路上や公園等で寝ている人の人数を把握する。また、調査時には寝ていないが、路上生活をしているとみられる人の人数も記録する。常設されていると思われる小屋やテントは、原則として1戸＝1名とした。また、人数には反映しないが、今後の調査や支援活動の参考とするため、荷物のみ置かれている場所も記録した。	
記録項目	①時間、場所、天候 ②場所分類…道路/駅（地下鉄入口を含む）/公園/河川/公共施設（役所・公民館・図書館等）/その他施設（私有地・商業施設等）③野宿の状態…常設の小屋やテントなど/寝袋、ダンボールなど/座っている、立っている、移動している/荷物のみ（※「荷物のみ」は人数にはカウントしない）④性別…男性/女性/不明 ⑤特徴や状況（自由記述）	
班編成	今回は徒歩班103班、車による広域移動班5班の計108班、本部16拠点からなる体制で調査を実施した。 徒歩班…駅周辺など各班の担当エリアを隈なく歩いて調査する（3～5名） 車班…徒歩版で調査対象外の公園や駅、公共施設などのスポットを調査する（3～4名） 本部…7箇所の集合・解散、安全管理。（2～3名）	

※8月3日13時~多摩川河川敷（57名）、8月5日13時~荒川河川敷（60名）も調査を予定していたが、気温が35℃を超えたため調査は中止とし、参加者は時間を縮小して河川敷を歩いた上で拠点におけるワークショップを行った。

2018 年夏東京ストリートカウント　目的とタイムライン

2018年夏東京ストリートカウントは、①ホームレス状態の方の人数の実態把握に加え、②ホームレス問題について外部への発信・注目（ソーシャルインパクト）の獲得、を目的として行いました。
調査当日、ボランティア参加者は深夜0：30に集合場所に集合。全体レクチャー後、集合写真を撮影。各班にてルート等を確認し、班ごとに割り当てられたエリアを2～3時間かけてくまなく調査しました。調査後は待機場所に帰還し、その場で集計結果（速報）を共有し、アンケートを元に意見交換しました。

ホームレス人口の実態を知る

①集合・出欠確認
②全体レクチャー

④班ミーティング

1. 班のメンバーと自己紹介し班長の連絡先、本部の連絡先をメモ
2. 担当範囲とルートを確認し、班内でシート記入係、地図係(通った経路を残しておく）などを適宜決める
3. 全員の準備がそろったら出発！

⑤調査

⑥調査が終わったら

1. 調査終了時には本部に連絡
2. 待機場所まで移動

⑦集計

待機場所にて、班ごとにデータをまとめ、本部に提出

AM
0:30 集合
1:00 出発
2:00
3:00
4:00
5:00 解散

1000人が見た東京を伝える

③0:45 集合写真

エリアごとに集合写真を撮影

⑧調査後アンケート

(1) 調査を終えて考えたこと、気づき
(2) ○○へ一言！

⑨班内での共有・意見交換
⑩班ごとの集合写真
⑪アンケート回収・解散

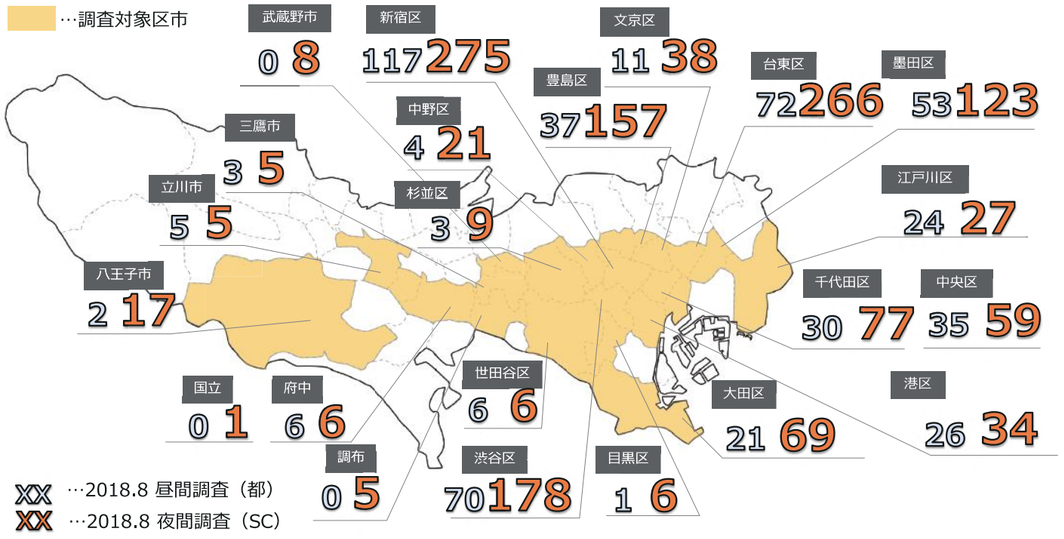
後日

結果を集計し公表・政策提言

後日

みなさんがどんな人でどんなことを感じたか、いいたいことは何か、を社会に発信します（匿名化します）

2018 夏東京ストリートカウント　実態調査結果



15区７市の総計

昼間調査(東京都) 526名 **約2.6倍** 夜間調査(東京SC) **1391名**

都全体での推計

約 **2300** 名

※都全体では左記の比率を採用し、
河川部分は1倍として算出

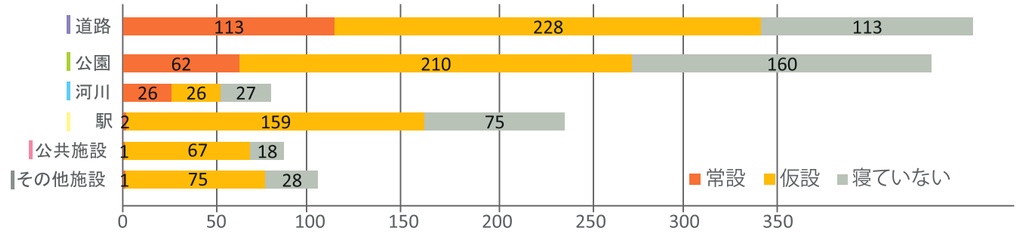
2018 年夏東京ストリートカウント　実態調査結果の考察

調査結果（左上）から、15区7市で1391名の方が野宿状態にあることを確認しました。これは東京都の昼間調査526名の約2.6倍にあたり、昼間と深夜では大きなひらきがあると言えます。また、東京都全体では約2300名の人々が一晩に野宿状態を経験していると推計されました。

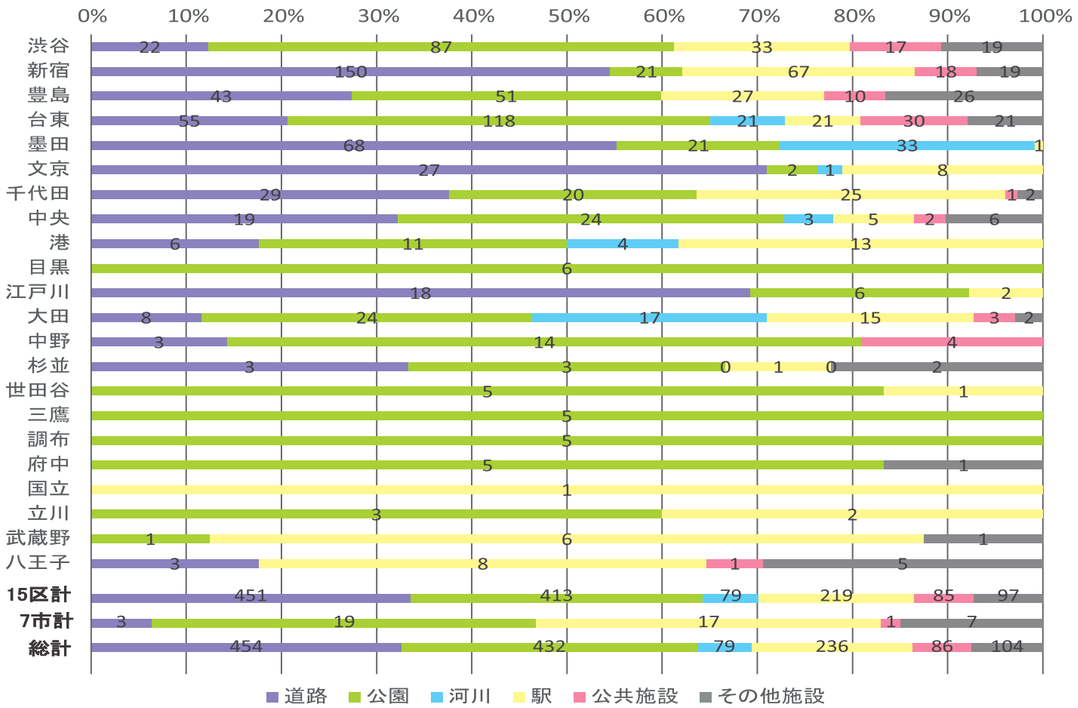
場所分類別（左下）では、道路が最も多く、次いで公園、駅となっています。一方、都の昼間調査では、河川が約半数を占め、公園、道路と続いています。

状態別（右下）では、仮設が約55%と多く、次いで寝ていないが約30%となっています。さらに、場所分類と状態のクロス集計（右上）をみると、駅や公共施設、その他施設ではほとんど常設がみられず、仮設が非常に多いことがわかります。このことは、駅や公共施設が閉まった深夜、その軒先に仮設の小屋をつくり野宿をしている人々が数多くいることを示していると考えられます。

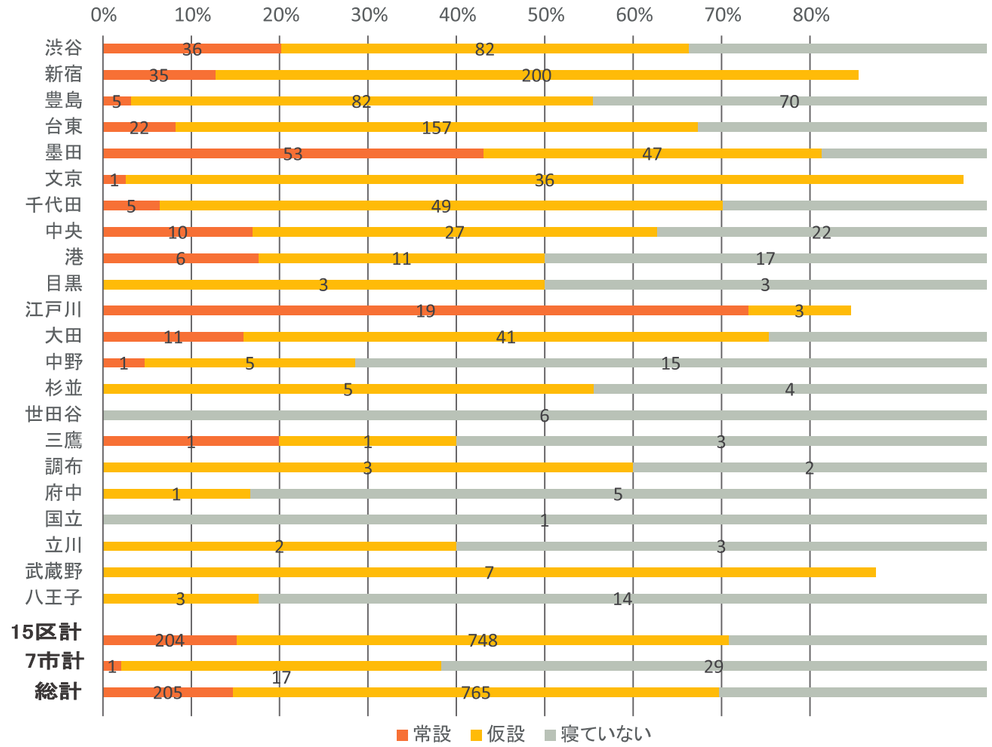
場所 × 状態クロス集計



場所分類別集計



状態別集計



2018 夏東京ストリートカウント　市民からの発信

どんな人が参加したのか？参加してどう感じたか？

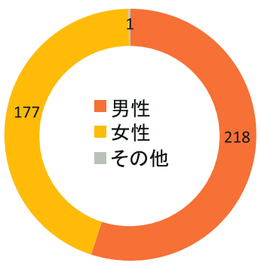
今回の調査に参加くださった市民ボランティアの方々は、合計416名（のべ506名）でした。このうち、本部スタッフを除いた396名に、調査当日アンケートの記入をお願いしました。アンケートの結果、参加者の属性（下）は男性が女性よりやや多く、所属では学生が47%を占め、年齢別でも19歳~30歳が47%を占めるなど、若い世代の参加が多いのが特徴です。また、普段ホームレス問題に関わる支援活動や研究活動を行っているかという問いに対して、活動をしていないと答えた人は64%おり、市民がホームレス問題に新たに関わる機会をストリートカウントが提供していることが伺えます。

次に参加者の感想（右）として、8つの質問に5段階で答えてもらいました。今回の3日間の調査に複数回参加した人がいるため、回答数は447件となっています。結果は、Q1「ストリートカウントは有意義だった」、Q5「ストリートカウントは社会をいつもと異なる視点で見る機会を提供する」、Q7「ホームレスが公共空間にいる権利を保障する都市宣言は必要だ」の設問に対してそう思うと回答した人が多く、一方でQ3「東京を実際に歩き、都市に対する印象が変わった」、Q8「東京はやさしい都市になれると思う」という設問への回答はかなりばらつきが見られました。

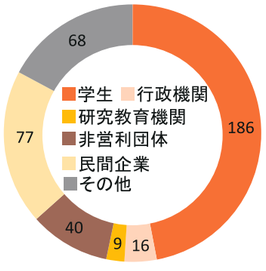
最後に、今回の調査後アンケートでは、ホームレスの人々や世界中の人々、都知事、東京の市民などに向けて、参加者にメッセージ（次頁）を書いてもらいました。その結果、2004の様々な声が集まり、普段はなかなか聞くことのできない多様な市民の方々の考えや想いが発信されました。ARCHでは今後、これらの声をそれぞれメッセージが宛てられた先に届け、届けられたメッセージへの返事をまた受け取り社会に発信し、そうして東京のホームレス問題について皆で考える機会や場を創造してゆきます。

参加者の属性（n=396）

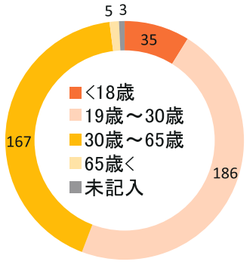
性別



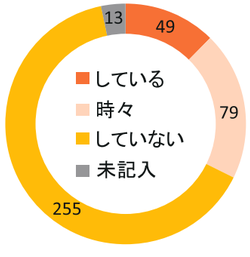
所属



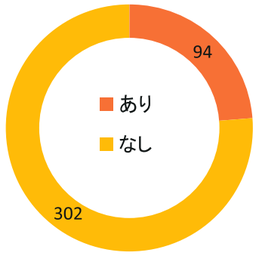
年齢別



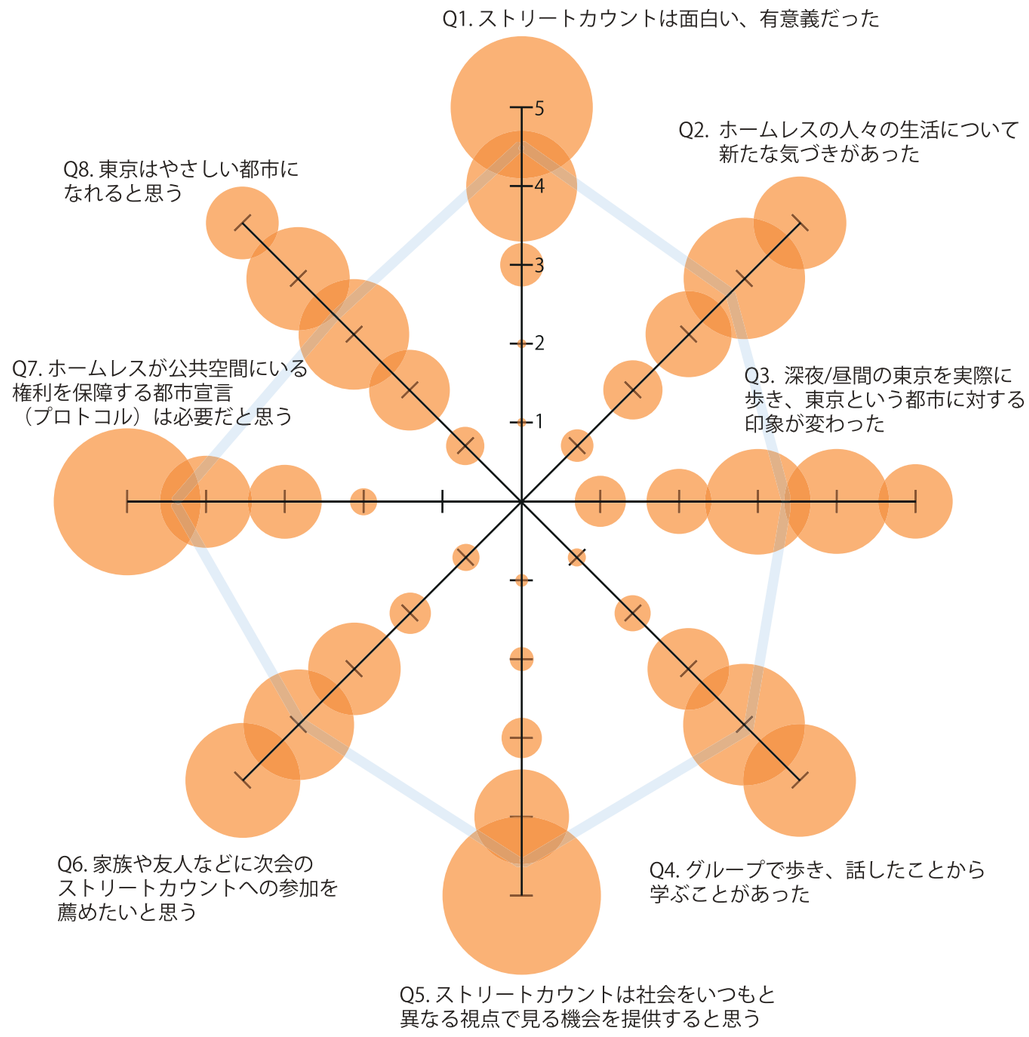
ホームレス支援等への関わり



ストリートカウント参加歴



参加者の感想（n=447）

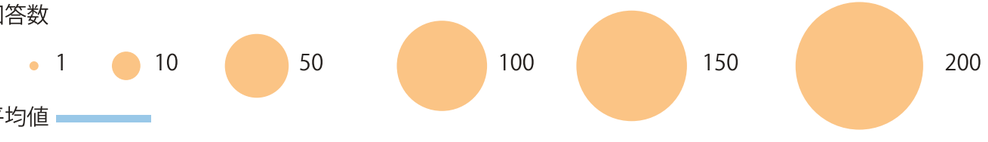


チャートの見方

選択肢

5: そう思う　4: ややそう思う　3: どちらでもない　2: あまりそう思わない　1: そう思わない

回答数



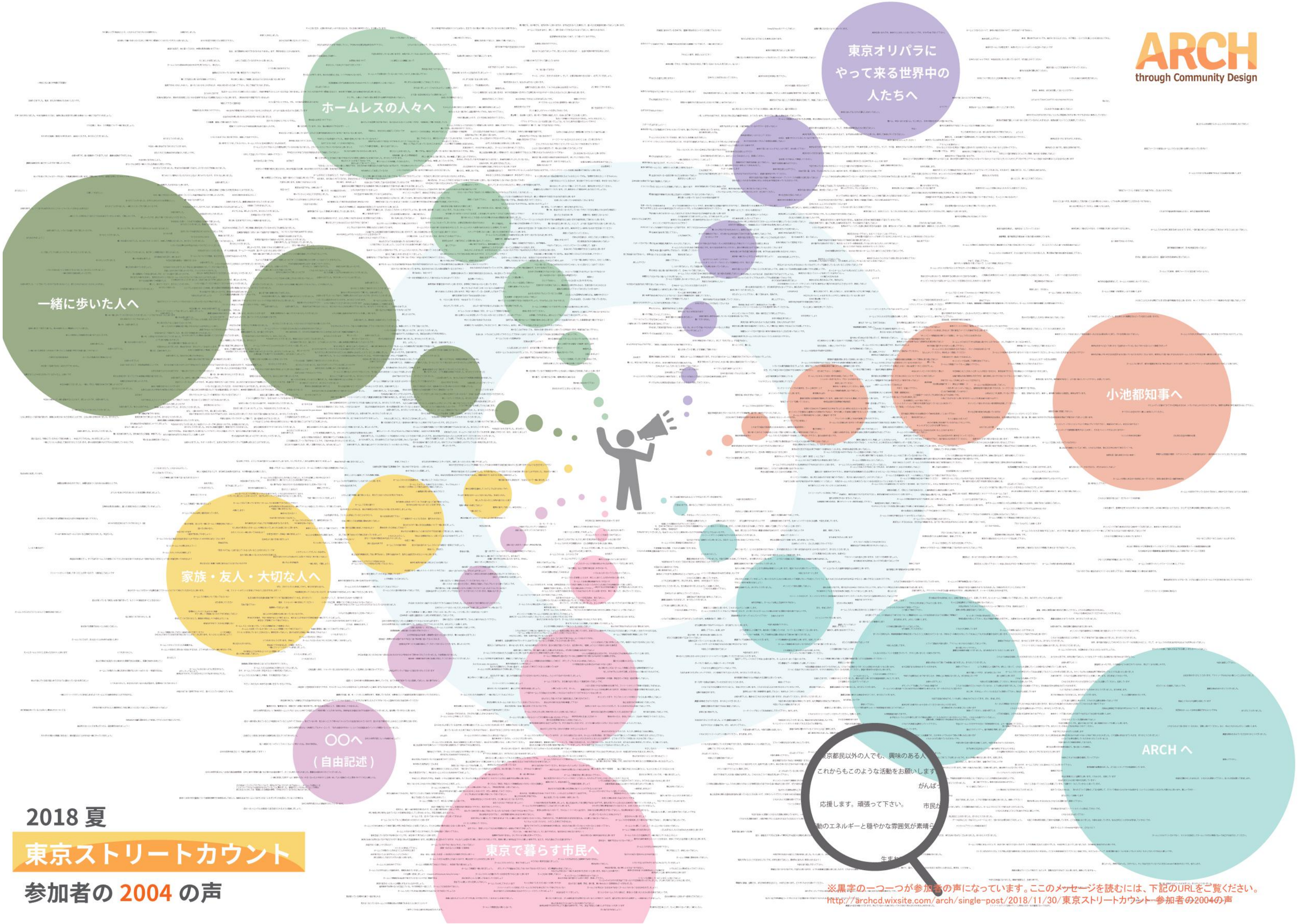
平均値

ARCH
through Community Design

2018 夏

東京ストリートカウント

参加者の 2004 の声



※黒字の一つ一つが参加者の声になっています。ここのメッセージを読むには、下記のURLをご覧ください。
http://archcd.wixsite.com/arch/single-post/2018/11/30/東京ストリートカウント-参加者の2004の声